

実践論文 世界史授業のあり方を考える

著者	篠塚 明彦
雑誌名	中等社会科教育研究
巻	29
ページ	13-22
発行年	2011-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2241/00158581

世界史授業のあり方を考える

篠塚 明彦*

1. 世界史を忌避する高校生たち

2006年にいわゆる「世界史未履修問題」がおこり、世界史という科目が大きな注目を集めることになった。そして、世界史という科目の必要性や、高校の現場で行われている世界史学習のあり方が盛んに論議されることになった¹⁾。皮肉にも、このことによって、不人気である世界史が脚光を浴び、世界史が高等学校の教育課程において必修であるということを、日本中の人々が広く認識することになった。その後、世界史登場から60年目にあたる2009年にかけて、世界史のあり方について議論が行われていた。しかし、そのような一過性の「世界史ブーム」も一段落し、最近では世界史の存在が再び人々の記憶から薄れていった感がある。しかし、世界史未履修問題がおこったときに様々に議論された今日の世界史学習のあり方については何ら解決を見ていないままである。もちろん、社会科教育や歴史学関係の学会等では引き続き世界史に関わる問題は議論されており、例えば「歴史基礎」の設置²⁾といったことの検討なども始められている。ただし、世界史のあり方を、制度の面も含めて抜本的に改革して行くには、まだまだ多くの時間を要するであろう。抜本的な改革に関して検討することは大いに必要であると考え、個人的には「歴史基礎」についても大

いに興味を持つところである。しかし、現場の教室に立ち、日々生徒たちと世界史の学習に向かい合っている教員としては、現時点で可能な世界史学習のあり方について検討を進める必要に迫られている。一概には言えないが、一つの目安として、センター試験における世界史受験者数の推移を見ると、世界史の不人気傾向には歯止めはかかかっていないといえるであろう。大学入試センターの公表しているデータ³⁾によると、2007年から2011年までセンター試験の総受験者数は、54万人から55万人台で推移し、2008年以降は毎年増加している。その中にあって、世界史（世界史Aと世界史Bの合計）の受験者数は、2009年以降の3年間に減少している。これは同じ地歴科の中でも、日本史や地理の受験者数の推移とは異なった傾向を示している。日本史も地理も受験者は毎年増減しているが、着実に減少しているのは世界史のみである。今後どうなるかはわからないが、このことは世界史不人気の傾向の一端を示しているだろう。新しい指導要領においても、議論はあったにせよ世界史の必修は引き続き維持された。仮定の話は意味がないのかもしれないが、今後必修が外された場合には、この傾向はどうなっていくのだろうか。

(表1) センター試験地歴科科目ごとの受験者数の推移

	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年
総受験者数	553,352	543,385	543,987	553,368	558,984
世界史A・B合計受験者数	93,619	96,092	96,213	93,093	90,395
日本史A・B合計受験者数	151,509	147,676	148,692	155,886	152,970
地理A・B合計受験者数	115,616	113,330	115,117	115,073	119,110

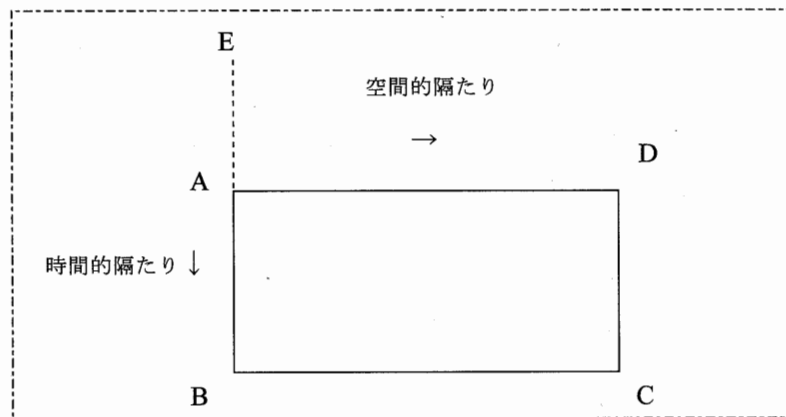
(大学入試センター HP 掲載のデータをもとに筆者作成)

* 筑波大学附属駒場中・高等学校

それではなぜ世界史は高校生たちの評判がよくないのであろうか。これについては、自らの教員としての経験では、「扱う範囲が広い」とか、「聞き慣れない見慣れない外国の地名・人名が多い」だとか、「年号などの暗記すべき事項が多い」などの声を耳にしたことがある。そして、これらの声に混じって、「遠い外国の昔のことに興味もてない」といった声もあった。世界史未履修問題が話題に上がったとき、テレビでは、受験生や教師

のインタビューが盛んに流されていた。その中で、印象に残った受験生の声があった。その受験生は、「自分には時間がない、世界史を勉強している暇などない。」と、さも迷惑そうに答えていた。大変素直に自分の気持ちを答えてくれたのであろう。世界史とは自分には関係の無いものと捉えている様子が伺えた。どうやら高校生にとって、世界史とは自分に関わりのない遠い世界の出来事の学習という意識があるようである。

(図1) 生徒の世界史に対する意識の概念図



上の図は、そうした生徒の意識を表わそうと試みたものである。AからEの各点は、以下のようなことを示している。

- A…現在の自分が暮らす場所・地点
- B…自分が暮らす場所・地点の過去
- D…現在自分が暮らす時代で、離れた場所・地点
- C…過去で、自分の暮らす場所・地点からも離れた地点
- E…自分の未来

仮にこのように設定すると、生徒の意識の中では、世界史はCに位置づくことになる。すなわち、今、自分が生きている場所・地点から、空間的にも隔たり（＝遠い外国のことという意識）、時間的にも隔たっている（＝昔のことという意識）ということになる。仮に、これからの自分が進むべき未来をEと位置付けるならば、Cは最も遠い存在、関係のないものと、捉えられてしまうのではないだろうか。だからこそ、先に

紹介した受験生の言葉が出てくるのである。世界史の授業で過去の事実や先人たちの成し遂げてきたものを学ぶことは、それ自体決して無意味なことではないであろう。しかし、自分たちの生活や現実世界との接点が見えないような細かなことばかりを授業で取り上げていても、はたして生徒たちは、「世界史を学ぶことの意味」を考えたり、あるいは感じたりすることができるのであろうか。もしかすると、世界史を教える教師の側の意識の中にも同様のことが言えるのかもしれない。生徒の側にも、教師の側にも世界史を学ぶことの意味が感じられないのであれば、当然の帰結として「未履修」といった問題が生じてくるであろうし、「世界史なんていらぬ」といった声も出てくるのであろう。

ところで、本当に世界史で学ぶべきことと、自分たちの世界や未来とは、遠く離れた存在なのだろうか。先に示したAやEと、Cとは遠く隔たっているのだろうか。そうではないはずである。実

際には、これらのAからDの点は、このような2次元の図形で表すことができない密接な結びつきをもっているはずであり、E（未来）へと、それぞれの点が結びついているはずなのではないだろうか。ある教科書の冒頭書かれている「世界史を学ぶこと」という文章の一節に、「私たちは、今こそ、ちょっと立ち止まって、「今」を直視する必要があります。大げさでなく、この美しい地球に生きる人々みんなが、安心して暮らしてゆくためには、どこに問題があり、どのようにそれを解決すればよいのか、ということを変更して考えてみるべきだと思うのです。そのためには、世界の人々が、おそらくは苦心に苦心を重ねながら、どのようにして「今」の世界をつくりあげてきたのか、という「来し方」を学び直してみる必要があります。そのことで得られるものは多いはずです。」とある（東京書籍『世界史B』）。また、別の教科書の「はじめに」には、歴史を学ぶ目的として、「…第一は、過去から現在までの変化の道筋を知って、いまわれわれの直面する諸問題を理解するうえで、参考にする、ということです。第二は、現在のわれわれとはまったくちがった過去の人々の生活状態を知って、いまのわれわれの生活を反省する、ということです。そして第三は、歴史のなかに生きた人間たち一人ひとりの生き方を知って、自分自身の生き方を考えてみる、ということです。」と述べられている（実教出版『世界史B 新訂版』）。いずれも、今われわれが暮らす世界と世界史の結びつき、これからの自分自身の未来と世界史との結びつきが述べられている。世界史とは遠い外国の昔のことを学ぶことが目的ではない。自分たちの今や、未来と密接に結びついたものなのである。そのことを生徒たちに理解してもらわない限り、世界史という科目に対して、多くの生徒たちが目を向けるようになってはくれないであろう。ともかくも、授業のなかで、世界史は遠い外国の昔のことではなく、今の自分が生きている世界の近くにある、あるいは結びついている存在であると認識される必要があるだろう。

2. 世界史学習変革の可能性

現在の高等学校学習指導要領「世界史B」の目標には、以下のように書かれている。

「世界の歴史の大きな枠組みと展開を諸資料に基づき地理的条件や日本の歴史と関連づけながら理解させ、文化の多様性・複合性と現代世界の特質を広い視野から考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。」ここで述べられていることは、世界史は自分たちの暮らす日本と切り離して考えてはいけない、現代社会と無関係に考えてはいけないということなのでないだろうか。

そこで、世界史は、決して遠い外国の昔のことなどではなく、今の自分が生きている世界の近くに、あるいは結びついている存在であると認識されるための授業の工夫が必要となってくる。そのために考えられることとして、次の二点をあげてみたい。一つ目は、「現在の諸課題・諸問題から考える世界史」、そして二つ目が、「自分たちの地域から見た世界史」⁴⁾という考え方である。

現代社会や現代世界の諸問題には大いに歴史的な背景がかかわっている。そうした背景なくしては、今の問題を考え、これからのことを考えていくことなどできないだろう。世界史で学ぶことは、遠い過去のことではなく、今の自分たちの世界と結びついていることを意識付けることが、「現在の諸課題・諸問題から考える世界史」のねらいである。生徒たちの意識のなかにある時間的な隔たりを埋めるための方策である。

これに対して、「自分たちの地域から見た世界史」というものは、意識のなかにある空間的な隔たりを埋めるための取り組みである。現行の科目設定では、日本史と世界史が個別の科目として設置されている。このこと自体には、多くの意味があるであろうし、即座に変更を加えることは難しいであろう。だが、意識は変えられるはずである。日本史と世界史が個別に存在することで、無意識のうちに、生徒やあるいは教

員自身も、日本史と世界史を切り離して考えてはいないだろうか。極めて当たり前のことを述べるようだが、日本も世界の一部である。当然、日本史は世界史を構成する一部であるはずであり、日本史を抜きにした世界史は考えられないであろう。この日本史と世界史の一体化を意識付けることが、「自分たちの地域から見た世界史」のねらいである。

そして、これら二つの考え方を有機的に組み合わせることによって、世界史の学習が、今の生徒たちの世界と結びつき、さらに未来へと結びついて行くのだろうと筆者は考えている。つまり、前述の図1におけるAとCを結びつけることが可能であると考えている。

なお、実際にはこれら二者は、それぞれ個別に存在するものではないであろう。現在の諸課題には、地域からの世界史の視点が内包されているし、地域からの世界史には、現在の諸課題が内包されているはずである。従って両者は大いに関連したものである。ただし、授業で扱う際には、両方を同時に前面に置きながということは困難であろうと考えられる。

本稿においては、とくに前者の「現在の諸課題・諸問題から考える世界史」を意識した実践を紹介しつつ、世界史学習の変革の方向性の一端を提起するにとどめたい。

3. 「現在の諸課題・諸問題から考える世界史」 実践例

(1) 「パレスチナ問題」を考える

2008年12月、「パレスチナ側（ハマス）からのロケット砲攻撃への対抗」との理由から、イスラエルによるガザ地区への大規模な攻撃が突然始まった。2008年の年末から2009年の年始にかけて、連日大規模な攻撃が行われ、ガザの民衆に多くの犠牲者が出ていた。イスラエルは攻撃目標をハマスの活動家としていたが、実際に攻撃の犠牲となっているのは、幼い子供を含む一般の民衆であった。日頃、パ

レスチナ問題にあまり敏感とは言えない日本のマスコミでも、さすがにこの問題は連日報じられるようになり、しかも日を追うごとに扱う内容も多くなっていった。新聞の紙面では、徐々に扱いが大きくなり、さらに関連した様々な解説もなされるようになっていった。TVニュースでもトップで扱われることも多くなった。そうした報道の中で、犠牲になった子供たちの姿を伝える写真や映像がいくつもあった。こうした写真・映像に接し、個人的に非常に衝撃を受け、憤りを覚えていた。

イスラエルの大規模攻撃がなされていた時期はちょうど、冬休み中であったために、生徒たちがこの問題についてどの程度関心を寄せ、考えているのか知ることはできなかった。しかし、こうした世界の現実を生徒たちには是非とも知ってもらいたいし、いろいろと考えてもらいたいという思いがあった。そこで、当初の授業計画を大幅に変更してでもパレスチナ問題を取り上げるべきであると考え、3学期の高校1年生の世界史⁵⁾の時間で扱うことにした。

リアルタイムで起こっている現実の問題を歴史と関わらせながら学び、さらにこれからどうすればよいのかと、未来へ目を向けていくことで世界史を学ぶことの意味も考えられるのではないかとの思いも込めてパレスチナ問題の授業に望むことにした。

(2) 単元内容の構成

「1. イスラエルのガザ攻撃」「2. ハマスとガザ地区」を併せて3時間で扱い、その他は、それぞれ1時間で扱った。単元全体の構成としては、今現在何が起こっているのか、そのことを知らなくてはならないであろうと思ひ、まずはじめに、現在の状況を確認することからはじめた。その上で、現在の状況に至った歴史的な背景を学ぶという形で全体を構成した⁶⁾。

ハマスをはじめとして、パレスチナの中にはイスラエルの存在を強硬に否定する人々がいる。それはなぜなのか。歴史的に考えることにした。まず、ヨーロッパにおける反ユダヤ主義、シオニズム運動の発生、イギリスの二枚舌外交といった点を確認した。次いで、ヨーロッパにおける反ユダヤ主義の問題を意識しつつ、ナチス＝ドイツによるユダヤ人迫害・虐殺の問題を考えた。その後、欧米の支援も受けながら、イスラエルが建国されていった経緯とそれに反対して起こった第一次中東戦争、そしてその結果生じたパレスチナ難民の問題等を整理、第三次中東戦争での敗北がアラブ諸国にもたらした影響や第四次中東戦争が日本を含めた国際社会に与えた影響を考えた。これらの経緯を踏まえてパレスチナ問題の解決に向けてどのような努力がなされてきたのか、そうした努力にも関わらず、なかなか和平が実現しないことの背景を考えてみることにした。そして、最後に生徒の意見を書いてもらうことにした。

ある程度予測はしていたが、実際に授業を行ってみると9時間では到底時間が足りず、最後はかなり駆け足で、なおかつ内容面でも必ずしも十分に深めることができたとは言いがたいものであったのかもしれない。

以下に、9時間の授業の全体像(表2)と、

「1イスラエルのガザ攻撃」と「2ハマスとガザ地区」の授業内容について紹介する(表3)。この単元の目的は、現在パレスチナで何が起きているかを知り、その事態に対して自分はどのように考え、これからどのように行動すればよいのか、その方向性を考えることに置いている。そして、現在に至るパレスチナの歴史的経緯(通史)は、その目的を達成するための材料であると位置づけ授業に取り組んだつもりである。従って、「1イスラエルのガザ攻撃」と「2ハマスとガザ地区」はこの単元の中でも重要な部分であると筆者の中では考えている。そのような考えに基づいて、この2つの授業については、詳しい授業内容を紹介することにした。

単元全体を見渡すと、現在の問題を導入にして、パレスチナ問題を中心に据えた通史の形をとっている。しかし、この単元の目的はあくまでも、今とこれからを考えることに置いている。従って、通史そのものを学ぶことが目的ではない。授業の際には、細かな年代や歴史用語、人名を余り気にせず、今現在進行していることとの関わりを意識して欲しいということを何度か強調した。また、発問や資料の取扱もそのような観点から行ったつもりである。

(表2) 単元「パレスチナ問題を考える」全体の概要

	テーマ	内容	発問等
1	イスラエルのガザ攻撃	<ul style="list-style-type: none"> ・ガザ地区をめぐる08年末からの動き ・ガザ地区におけるパレスチナ人の犠牲者と現状 ・ガザ地区とは? ・ハマスとは? 	いったい今何が起きているのだろうか?
2	ハマスとガザ地区	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでガザ地区がおかれてきた状況 ・停戦に向けたイスラエルとハマスの要求 ・ハマスとガザ地区の関わり ・パレスチナ自治区におけるハマス政権の誕生と国際社会の反応 	ハマスはなぜイスラエルをみとめないのだろうか?

3	ユダヤ人国家の建設を目指して	<ul style="list-style-type: none"> ・19世紀ヨーロッパのナショナリズムとドレフュス事件 ・シオニズム運動の始まり ・イギリスの二枚舌外交 	ユダヤ人はなぜパレスチナに国家樹立を目指したのか？
4	第2次世界大戦とユダヤ人	<ul style="list-style-type: none"> ・パレスチナへのユダヤ人移民の推移 ・ドイツの動向（ナチの台頭）とユダヤ人 ・第2次世界大戦後のユダヤ人の動き 	パレスチナへの移民数の推移に波があるのはなぜだろうか？
5	イスラエルの建国	<ul style="list-style-type: none"> ・イスラエル建国と欧米の支援 ・第一次中東戦争 ・パレスチナ解放運動の始まり 	欧米はなぜイスラエル建国を支持したのだろうか？
6	中東戦争とその影響	<ul style="list-style-type: none"> ・第二次中東戦争 ・第三次中東戦争とイスラーム復興運動の変化 ・第四次中東戦争と石油危機 	「イスラーム原理主義」の過激派がなぜ生まれたのだろうか？
7	パレスチナ解放運動とアラブ諸国	<ul style="list-style-type: none"> ・「テロ」の激化 ・パレスチナ解放運動への国際的世論の批判 ・パレスチナ解放運動へのアラブ諸国の対応 	映画などでパレスチナ解放運動はどのように描かれただろうか？
8	パレスチナ和平の模索	<ul style="list-style-type: none"> ・パレスチナ和平に向けての努力 ・実現しない和平 	なぜ和平が進展しないのだろうか？
9	今我々にできることは	<ul style="list-style-type: none"> ・パレスチナ問題について、日本に暮らす自分たちに何ができるだろうか、何をすべきなのだろうかを考える 	

(表3) 「1イスラエルのガザ攻撃」と「2ハマスとガザ地区」授業内容

	項目	学習内容・板書事項	発問・資料等
1. イスラエルのガザ攻撃	ガザをめぐる2008年末からの動き	<ul style="list-style-type: none"> ・2008年12月半ば～2009年1月はじめまでのガザをめぐる状況 ・ガザにおけるパレスチナ人の犠牲者 死者930人、負傷者4280人（1/18現在、アル=ジャジーラの発表による） ・現在のガザの状況 イスラエル軍による完全封鎖（検問所の封鎖）、食糧・医薬品などの不足、インフラの破壊、イスラエル軍による「無差別攻撃」 	<ul style="list-style-type: none"> ・朝日新聞、毎日新聞、読売新聞の記事をもとに整理 ・アラブの立場に立つアル=ジャジーラの報道であることを補足説明 ・資料（新聞記事）をもとに生徒に確認させる
	「ガザ」とは	<ul style="list-style-type: none"> ・パレスチナ自治区とは ヨルダン川西岸地区+ガザ地区 ・ガザ地区の概要 面積：約365km²、人口：約150万人、人口密度：4110人/km² ヨルダン川西岸地区→ファタハ勢力下 ガザ地区→ハマス勢力下 	<ul style="list-style-type: none"> ・東京や大阪の人口密度と比較しながらガザが人口密集地であることを確認 (発問) 人口密集地への攻撃はどのような事態を引き起こすだろうか

	「ハマス」とは	<ul style="list-style-type: none"> ・ガザを勢力下に置くハマスとはどのような組織だろうか イスラーム主義（イスラーム復興主義）の考えに基づき、弱者保護、相互扶助（学校・病院・貧困層の救済など）の活動も行う パレスチナ自治区で支持拡大（06年選挙で圧勝） 07年6月 武力でガザからファタハ勢力を追い出す 	<ul style="list-style-type: none"> ・小杉泰編『イスラームに何がおきているのか』（平凡社）をもとに説明 （発問）なぜ選挙でハマスが大勝したのだろうか （発問）なぜハマスはガザからファタハを追い出したのだろうか
2. ハマスとガザ地区	停戦のために	<ul style="list-style-type: none"> ・停戦のための双方の要求は何だろう 〈イスラエルの要求〉 ハマスの武装阻止、イスラエルに対するロケット砲攻撃全面停止 〈ハマスの要求〉 イスラエル軍のガザからの撤退、ガザの封鎖解除 	<ul style="list-style-type: none"> （発問）中東地域最強の軍事力を持つといわれるイスラエルを攻撃すれば、大きな反撃を受けるとわかっていながらなぜハマスは攻撃をするのだろうか
	最近のパレスチナ自治政府の動き	<ul style="list-style-type: none"> ・ハマス政権の誕生 2006年1月 パレスチナ評議会（パレスチナ自治区の事実上の国会）選挙 ハマス勝利（ハマス…76議席/132 ファタハ…45議席/132） ハマス：イスラエルの存在を否定 イスラエル、欧米、日本→イスラエルの存在を否定する自治政府（ハマス政権）を批難 ・ハマスの妥協と態度硬化 2007年3月 ハマス・ファタハ連立内閣成立 ハマスへの批難続く 2007年6月 ハマスがガザ地区（ハマスの拠点）を制圧 アッバース議長（パレスチナ自治政府大統領） →内閣解散を宣言（非合法）、ハマスを排してして内閣組織 イスラエルの対応 	<ul style="list-style-type: none"> ・土井敏邦編『パレスチナはどうか』（岩波ブックレット）を資料に2006年1月以降の動きを整理 （発問）ハマスの妥協に対してイスラエルや諸外国はどのように対応したのだろうか
	ハマスによる制圧後のガザの状況	<ul style="list-style-type: none"> ガザの封鎖強化（欧米も支持、エジプト容認） 食糧等の供給…国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）、食糧密輸トンネル ハマス→ロケット砲による抵抗 2008年6月 ハマスとイスラエルの停戦 	<ul style="list-style-type: none"> （発問）ハマスはなぜ頑ななまでにイスラエルを認めないのだろうか ・その理由を歴史的に見ていくことの必要性を説明

(3) 生徒は授業をどのように受け止めたのか？

この授業に対して、生徒たちの反応は非常に良かった。もちろんすべての生徒というわけではないが、多くの生徒が興味を持って授業に臨んでいることが表情や授業中の発言からも伝わってきた。印象的であったのは、普段の世界史の授業においては、お世辞にも真面目に取り組んでいるとは言えないある生徒が、「パレスチナ問題のことを親に話したら、誤解をしているので自分が教えてあげた。」と話してくれたことである。また、別な生徒は「家でニュースを見ながら、パレスチナ問題を話題にした。」と話していた。

生徒の声を聞いてみると、様々なことを考えたことがわかってくる。日本の外交のあり方、メディアリテラシーの問題などに言及しているものも少なからずいる。授業の中では、こうした問題を直接取り上げて考えてみることはなかった。パレスチナ問題を通じて、生徒たちが自分で考え、自分たちなりの答えを出したのである。生徒の声の中から、一人の意見の一部を紹介しておきたい。

〈ある生徒の声〉

正直、世界史の授業で扱うまであまり関心を抱いていなかった。ニュースを見ても「ああ、大変そう。何で争っているのだろう、馬鹿みたい。」と思うくらいであった。おそらくほかの高校生もほとんどそうだろう。貴重な時間を割いて中東のことを詳しく扱ってくれたことをありがたく思っている。少し知識を得るたびに現地の人々が何を考えているのか、何を問題としてあれほどまでに争うのか少しずつ見えてきた。ニュースも毎日見るようになり、本まで買って読んだ。高校生に何ができるかといわれてもそんなに大それたことはできない。でも高校生であっても認知することはできる。無関心にならずアンテナを広げておくことが重要なのだろう。世界で問題となっているのは中東だけではない。ほかにもたくさんあるだろう。自分から進んで世界のことを知ろうとする姿勢が大切であり、また、とても面白いということの世界史の授業から学びました。

4. おわりに

現実におこっていることを出発点に授業を展開し、今の問題と世界史が大いに関わっている

ことを意識づけようとした。授業において導入的に現在の世界でおこっていることを扱い、その後通史的にパレスチナ問題を扱った。しかし、導入となった部分は、単なる導入という位置づけではない。その後には扱う通史に興味を持たせるものではなく、いわば導入自体が学習の主たる目的とも言える。むしろ、通史の部分が導入に従属するような位置づけにあり、現在おこっていることをより深く理解するための材料、これから自分がどのような行動してゆけばよいのかということを考えるための材料として通史を扱うことを意識した。その結果、前述の生徒のように、世界のことを知ることの重要性やおもしろさ、さらには世界史を学ぶことの重要性に気づき、自分自身で勉強しようとするものも現れた。授業を出発点として、自ら課題を見だし、学ぶ姿勢を見せ始めた生徒がいた。このことは、「世界史の授業とは一体何をすればよいのだろうか」ということの答えの一つを指し示してくれたように思える。生徒にとって、世界史の授業で扱うことが、単に授業の中だけの話では留まらず、今現実に関心している世界と接点を持つことができたのであろう。そして、これからの問題とも関わって世界史の授業を受け止めたのであろう。それゆえに、生徒たちは、世界史を学ぶことに意味を見出したと考えられる。

前述の図1のように、世界史で学ぶべきことと、自分たちの世界や未来とは、遠く離れた存在であり、AやEと、Cとは遠く隔たっているように意識されてはならないはずである。実際には、これらのAからDの点は、密接な結びつきをもっているはずであり、E（未来）へと、それぞれの点が結びついていると意識されなくてはならないはずなのである。そのことを生徒たちが理解し、納得できたときに、世界史という科目に対して、多くの生徒たちが目を向けるようになるであろう。ともかくも、世界史は、遠い外国の昔のことではなく、今の自分が生きている世界の近くに、あるいは結びついている存

在であると認識されることが必要なのである。

筆者が取り組んできた実践で、この問題がすぐに解決するとは思っていない。しかし、授業のあり方によって、生徒の意識は大いに変化してくることは、示すことができたと考えている。

「現在の諸課題・諸問題から考える世界史」、「自分たちの地域から見た世界史」という二つの考え方を有機的に組み合わせることによって、世界史の学習が、生徒たちの現実世界と結びつき、さらに未来へと結びついて行くような意識を持てるようになるのではないだろうか。現在、筆者は後者の、「自分たちの地域から見た世界史」をより重視した実践も模索中であるが、本稿では、こ

れに関わる実践については紹介することができなかった。今後、「自分たちの地域から見た世界史」に関わる実践を整理し、その中での生徒の意識の変化を確かめていきたい。また、そのうえで、「現在の諸課題・諸問題から考える世界史」、「自分たちの地域から見た世界史」という両者を有機的に組み合わせた世界史の授業改革の提言を行うことができるように努めていきたい。

(付記) 本稿は、2009年11月15日に行われた「中等社会科教育学会シンポジウム」での報告をもとに、大幅に加筆・修正したものである。

註

- 1) 『歴史学研究』2009年11月増刊号(09年歴史研大会報告)には、〈特設部会〉「社会科世界史60年」で報告された3本の論文が掲載され、この間の経緯や問題点などが整理されている。
- 2) 2010年12月4日に行われた茨城大学人文学部・地域シンポジウム「茨城から世界史研究・世界史教育を考える」において、油井大三郎氏が「高校の歴史教育をどう改革するか」と題して、「歴史基礎」についての議論を紹介している。油井氏の報告レジュメは、次のサイトで読むことができる。<http://www.history.1.chiba-u.jp/~riwh/japanese/index.php?itemid=176&catid=7>
- 3) 大学入試センター HP http://www.dnc.ac.jp/modules/center_exam/content0097.html
- 4) 『世界史のしおり』(帝国書院)2011年1月号で山口県立高等学校の藤村泰夫氏が「地域からの世界史プロジェクト」の紹介を行っている。
- 5) 本校の場合、3学期には中学校入試と高校入試が行われるため、授業時数が大幅に少なくなってくる。現在、世界史は高校1年生で「世界史A」2単位を履修しているが、2単位の授業の場合には、3学期には、10回程度し

か授業ができないという厳しい現実がある。実際に08年度の場合には、9時間であった。

- 6) 授業を行うにあたっては以下に挙げるものを参考にし、授業のおいても適宜資料として使用した。
 - ① 2008年12月～2009年1月の朝日新聞、毎日新聞、読売新聞の関連記事
 - ② AMNESTY INTERNATIONAL JAPAN のホームページ掲載の記事
(<http://www.amnesty.or.jp/modules/wfsection/article.php?articleid=2094>)
 - ③ 土井敏邦編『パレスチナはどうなるのか』(岩波ブックレット)2007年
 - ④ 阿部俊哉『パレスチナ』(ミネルヴァ書房)2004年
 - ⑤ 奈良本英佑『君はパレスチナを知っているか』(ほるぷ出版)1991年
 - ⑥ 栗原優『ナチズムとユダヤ人絶滅政策』(ミネルヴァ書房)1997年
 - ⑦ ラウル＝ヒルバーク『ヨーロッパ、ユダヤ人の絶滅(上)』(柏書房)1997年
 - ⑧ 石田勇治「人種主義・戦争・ホロコースト」(『岩波講座世界歴史24』所収)1998年
 - ⑨ 広河隆一編『パレスチナ1948 NAKBA』(合同出版)2008年

⑩昭和の歴史刊行会編『図説昭和の歴史 12 世界の日本』（集英社）1980 年

⑪高橋和夫『アラブとイスラエル』（講談社現代新書）1992 年

⑫村上由美子『ハリウッド 100 年のアラブ』（朝日新聞社）2007 年

⑬広河隆一『パレスチナ新版』（岩波新書）2002 年

⑭小林祐子『パレスチナ・モン・アムール』（彩流社）2004 年

⑮土井敏邦『現地ルポ パレスチナの声, イスラエルの声』（岩波書店）2004 年